

# イントネーション形式と意味

一日中の形容詞1語文の比較一

楊 曉 安 及川 佳織

## 1. はじめに

中国語の“語気”という語の示す概念はかなり広いものである。語や文の中で音の表現する強さや速さを示すこともあれば、発話者による肯定、否定、疑問、命令、感嘆といった意味や態度 (mood) を示すこともある。胡明揚 (1981) は、語気は発話者の心情を表すもので、以下の3つに分類できるとしている。(1) 感情の表現。周囲の状況や相手の発話の内容によって引き起こされる感情の表現で、賛嘆、驚き、不満などがある。(2) 態度の表現。発話者自身の発話の内容に対する態度で、肯定、非肯定、強調、婉曲などがある。(3) 心情の表現。相手にある情報を伝えようとするもので、希求、命令、疑問、動員、応答承諾などがある。また、張秀 (1959) は、中国語の動詞における語気の体系を分析し、中国語の動詞の語気には文法上、単純語気と複合語気の2種類があるとしている。単純語気は直接的陳述語気、可能語気、条件語気、仮定語気、希望語気が含まれ、複合語気には条件可能語気、条件希望語気とその他が含まれる。賀阳 (1992) は中国語の語気を機能語気、評価判断語気、感情語気の3つに分類している。機能語気は伝統的な単文に対する語気分類に近く、陳述、疑問、命令願望、感嘆の4つがある。評価判断語気は認知、推測判断、理由判断、可能希望の4つがあると、それぞれをさらに細かく分類している。感情語気は意外、予想実現、幸運、情意などに分類されている。勁松 (1992) は北京語における語気の音声形式を分析し、語気を叙述語気 (叙述、応答、態度表明の3つ)、疑問語気 (疑問、質問、確認、意外の4つ)、命令願望語気 (意向の探索、希望、命令の3つ)、情意語気 (賞賛、驚き、不満、嫌悪などの感情表現) に分類している。語気は非常に概念が広く、その分類結果は人によってさまざま、基準設定の違いや分類の細分化の程度により違いが出ている。しかしながら、これらの分類を意味の観点から見ると、その違いはあまり大きなものとはいえない。語気を表す形式にはイントネーションと語気詞があるが、イントネーションが主で、語気詞は従である。どんな文にもまとまった1つのイントネーションがあるが、逆に文末に語気詞がない文はいくらでもある。このようなことから見て、語気の主な表現形式はやはり音声にあると言ってよく、高低、長短、緩急、強弱といった音声の特徴の変化によって意味の区別がなされている。これは言い換えれば、異なる語気内容を示しているということである。

1語文とは、名前のとおり1語から成る文である。ある語は辞書に記述されているとき

は語の属性を示すだけにすぎない。それは、その語が静態的であって生きたものではなく、ある言語体系の中で人がその語に付与した内在する概念、意味の属性、評価の意味、感情態度といった語義を示すだけだということだ。語が生きたものではないということは、その語が不変のもので、語義が抽象的なものだということである。しかし、ある発話者がその語を選んである言語コミュニケーションを行い、ある情報を伝えたときには、その語は生きたものとなり、動的な特徴をもつようになる。つまり、この語は不変の抽象的な語義から離れ、言語コミュニケーションの環境と結びついて独特な語義をもち、独特なコミュニケーション情報を示すようになる。これは一種の“昇格”であり、それは発話者がその語にあるまとまったイントネーションを付与したことによってわかる。語から文への“昇格”は、2つの条件が満たされることによってなされる。1つはまとまったイントネーションの付与、2つめは具体的なコミュニケーション環境において単独で情報を担うことである。

1語文については、さまざまな考えがある。例えば、1語文には以下の2つがあるとするものがある。1つは「非主述文」といわれる独立的1語文で、完全にまとまった単文形式をもち、何かを補充する必要はなく、また補充することができない文である。2つめは主述文の省略されたもので、何かの成分を付加することによってもとの主述文になれることから、臨時に省略された発話の一種と考えられる。拙文では1語文を文法面からではなく音声と意味の関係から見ようとするもので、この2つを同様に扱う。われわれは、1語から成る文が異なる語気内容を示す際に、音声面でどのような変化や差があるかを考えようとするものである。

どんな言語であっても、発話者がある文によってある明確な情報を伝えようとするとき、通常の形式では文は主題（叙述される対象）と解説（叙述）によって構成される。主題とは「誰」「何」といったもので、解説とは「何だ」「どうだ」といったものである。こうした完全な形式が多くの言語において標準的な文の構造だといっていいだろう。しかし、実際のコミュニケーションにおいては文のすべての要素をはっきりと言わなければならないということではなく、ある状況のもとでは一部を省略してもかまわない。こうした省略される部分というのはコミュニケーションをする双方にとって言わなくてもわかる部分であり、省略することによってコミュニケーションや理解に影響を与えることはなく、むしろ省略によって時間のロスを省き、コミュニケーションの効率を上げることさえある。さらに、主題と解説のどちらかが不明であり、それが欠けた状態で発話することもあれば、その不完全な部分を補って完全な主述文を作ることができないこともある。このようなことから、言語活動において1語文というのは非常に多く、一般的によく見られる文だということが言える。

1語文は1語から成る文であり、コミュニケーションの内容から考えて一般に実詞（内容語）により成る。虚詞（機能語）は明確な概念をもっていないため明確な情報を伝える

ことができず、まとまった文を構成することは困難だからである。従って、文法上においてのみ意味のある虚詞は1語文から排除することとした。中国語における“所以……”、“但是……”といった文や日本語における“……で”、“だから？”といった文は虚詞により構成される1語文で、コミュニケーションにおいてしばしば見られるものだが、これは他の部分が省略されたもので、具体的なコンテキストやコミュニケーションにおける話題の背景を離れて成り立つものではない。やはり一般的にいて、1語文は実詞により構成される文とすべきである。

実詞には名詞、動詞、形容詞、代名詞などがあるが、これらはすべて単独で文を作り、まとまった意味内容を示すことができる。拙文では、中国語と日本語における形容詞1語文の音声形式の比較から入り、両言語において形容詞1語文が表す音声と意味の違いを探ろうとする。

どんな文であっても、その文は内容を示す以外に一定の語気を示す。発話者の語気が異なれば、文の意味も異なってくる。語気は発話者の意図や感情の表現であり、その範囲は非常に広い。叙述、命令、疑問、感嘆、相談、推測、確認、反駁、否定などさまざまな語気があるが、またそれぞれ程度による違いもあり、このように細分化すると語気の種類は膨大なものになってしまう。われわれには語気そのものの詳細な分類は必要ではなく、拙文の目的からそのおおまかな分類に限ることとした。総体的にどんな言語にも語気の種類は観点から言えば、陳述、命令、疑問、感嘆の4種が存在する。これらはさらに細かく分類可能であり、それぞれに細かい意味内容の差があるが、大別すればこの4種になる。あらゆる語気が他の語気との弁別を可能にするそれ自身のイントネーション形式をもつことは、長年にわたって多くの人に認められてきたことであり、少なくとも上記の4つの異なる語気分類に基づく4つの異なるイントネーションが存在することは明らかである。

イントネーションというのは非常に難しい概念である。4つのイントネーションが音声形式上で異なる表現となることは明らかであるが、それぞれのイントネーションの音声形式を比較した際に違いがあるということ、そしてその異なる音声形式が意味と対応関係をなしているということがわかっているにすぎない。つまり、イントネーションの違いというのはまだ科学的なものとは言えず、直感的なレベルにとどまっているということでもある。ある文を聞いたとき、どのイントネーション形式に属しているかを判断することは可能であるが、これは経験や習慣に基づくものだ。「陳述のイントネーションとはどのようなものですか」「陳述のイントネーションと感嘆のイントネーションの違いは何ですか」「一般的な疑問文と反問ではイントネーションにどのような違いがあるのですか」こういった質問に対して、われわれは明確に答えることができない。それは、われわれ自身が中国語の声調のように科学的な一定の型が、イントネーション形式にも存在するか否かをまだわかっていないからである。

中国語にも日本語にも上記の4つのイントネーションが存在し、それは形容詞1語文に

においても同様である。では、この両言語におけるイントネーションの音声上の特徴とは何だろうか。イントネーションと意味との関係はどのようなものだろうか。これが拙文の研究目的である。

## 2. 実験資料

### 2. 1. 中国語の資料

われわれは以下のような声調の組合せの異なる 20 の 2 音節形容詞を中国語の音声実験の資料とした。(1) (下表)

	陰平	陽平	上声	去声	轻声
陰平	安心	新潮	新颖	深刻	结实
陽平	烦心	时髦	和蔼	急迫	红火
上声	简单	狡猾	友好	冷静	老实
去声	耐心	刻薄	瘦小	放肆	漂亮

### 2. 2. 日本語の資料

また、以下のような 3 音節形容詞 36、4 音節形容詞 32 を日本語の音声実験の資料とした。(2) (下表)

3 音節				4 音節			
青い	痛い	惜しい	黒い	悪どい	かわいい	細かい	目ざとい
洪い	狡い	近い	速い	賢い	汚い	少ない	短い
広い	古い	弱い	暑い	めでたい	うるさい	か弱い	鋭い
旨い	痺い	臭い	怖い	醜い	怪しい	おかしい	苦しい
白い	狭い	深い	欲しい	凛々しい	卑しい	厳しい	詳しい
安い	若い	偉い	辛い	寂しい	眩しい	侘しい	うれしい
くどい	寒い	凄い	高い	悔しい	険しい	楽しい	空しい
長い	低い	太い	まずい	涼しい	激しい	貧しい	女々しい
緩い	悪い	強い	鈍い				

### 3. 実験の方法

この実験は、以下の4段階で実施した。

#### 第1段階 資料の録音

まず2名の中国語話者、2名の日本語話者を選び、上記の資料を陳述、感嘆、疑問、反問の4つの語気で読んでもらい、録音データを作成して分析資料とした。

#### 第2段階 資料の確認

録音した資料を5名の中国語話者と5名の日本語話者に聞いてもらった。実験には静かな部屋を選んでそれぞれの資料を3回聞かせた。資料はアランダムな順序で聞かせ、それぞれ聞こえた資料が陳述、感嘆、疑問、反問のうち、どれにあたるかを判断してもらい、下表のような結果を得た。

中国語の聴取判断結果					日本語の聴取判断結果				
聴取者	陳述	感嘆	疑問	反問	聴取者	陳述	感嘆	疑問	反問
Z-A	120	120	120	120	R-A	408	408	408	408
Z-B	122	118	123	117	R-B	408	408	403	413
Z-C	120	120	117	123	R-C	408	408	408	408
Z-D	120	120	119	121	R-D	408	408	405	411
Z-E	120	120	118	122	R-E	408	408	412	404
弁別率	120	120	121	119		408	408	407	409
	99.7%	99.7%	99.7%	99.7%		100%	100%	99.8%	99.8%

以上の結果から、われわれの作成した中国語・日本語の資料はサンプルとして有効であり、基準を満たす言語資料として分析に使用できると判断した。

#### 第3段階 音声分析ソフトを使って資料の音声的特徴を分析する

中国・南開大学の開発した《桌上语音工作室》(MiniSpeechLab) というソフトを使い、日中両言語の形容詞1語文が4つの語気において示す音声上の特徴を詳細に分析した。主としてそれぞれの資料の基本周波数曲線、振幅、長さを抽出し、日中両言語の形容詞1語文が異なる語気においてそれぞれどのような音声上の特徴を示すかを探った。

#### 第4段階 音声上の特徴の比較

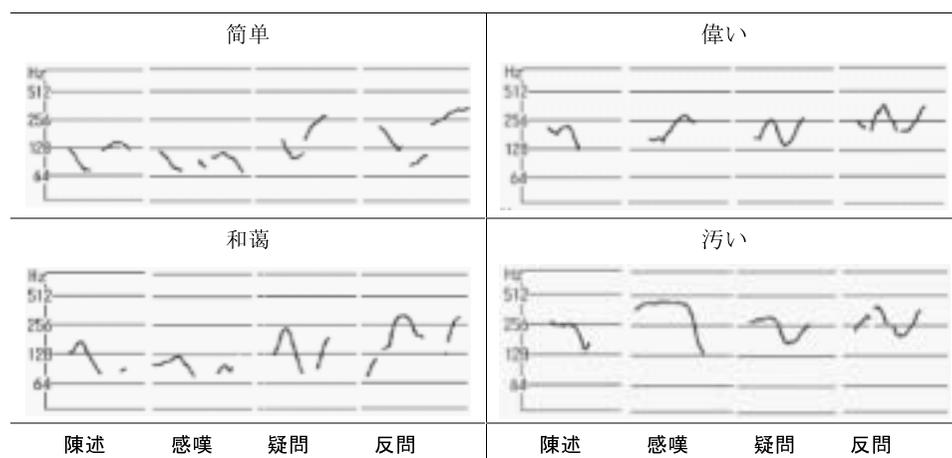
日中両言語の1語文において異なる語気が示す音声上の特徴の違いを観察し、日中の形容詞1語文が異なる語気を示すために用いる音声的手段の違いや変化を分析した。

## 4. 音声分析

### 4. 1. 基本周波数の比較

まず、日中の形容詞1語文が陳述、感嘆、疑問、反問の語気において示す基本周

波数曲線をみてほしい。(下図)

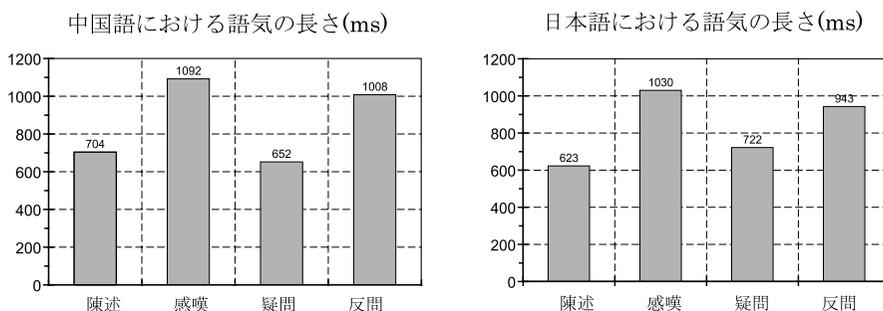


この基本周波数曲線からみて、両言語の語気を示すものは比較的一致している。陳述と感嘆においては下降しており、疑問と反問は上昇している。特に最後の音節が上昇している。もちろん互いに違いもあり、中国語の感嘆文の起点は陳述よりも低く、終点も陳述文より低い。しかし日本語においては起点・終点の周波数には大きな違いはない。また、疑問と反問において中国語と日本語は同じ傾向を示し、2つの特徴がある。(1) 音声形式において、中国語の第1音節はもとの声調の型を保持しているが、第2音節はもとの声調に関係なく、すべて上昇している。従って第1音節の声調により、文全体の基本周波数曲線は1種類になるとは限らず、あるものは低いところから高いところまでずっと上昇する形を示し、あるものは上昇・下降の両方がある屈折した形を示す。しかし、日本語では、疑問であっても反問であっても基本周波数は上昇・下降の両方がある屈折した形しかない。

(2) 中国語では、反問の基本周波数の音域は明らかに疑問より広い。例えば“簡単”の疑問文の最低周波数は126Hzで、最高は310Hzであり、その差は184Hzである。これに対し、反問の最低は88Hz、最高は376Hzでその差は288Hzある。反問の周波数域は疑問の周波数域の1.6倍になっている。“和藹”ではさらに顕著で、疑問の最低周波数が85Hz、最高が274Hz、差が162Hzであるのに対し、反問は最低が76Hz、最高が341Hz、差が265Hzで、反問の周波数域は疑問の2.1倍になっている。しかし日本語ではこの状況は異なり、疑問と反問の周波数域の幅は比較的小さい。例えば“偉い”の疑問文における最低周波数は153Hz、最高は274Hzで差は128Hzである。反問では最低が217Hz、最高が371Hzで差が154Hzであり、反問の周波数域は疑問の1.2倍にすぎない。

## 4. 2. 長さの比較

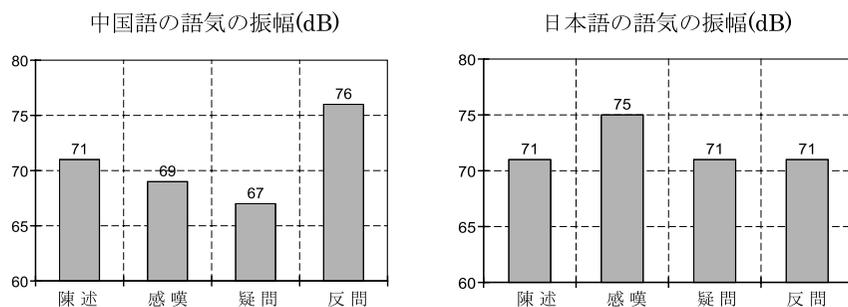
4つの語気内容を示す場合、内容の違いを強調するため、音の長さにも違いが出る。われわれは資料の長さを計算し、以下のように中国語と日本語のそれぞれの語気における平均の長さの数値を得た。



上記の2つのグラフから、4つの語気内容を示す場合、平均の長さに違いがあることがわかる。陳述文の長さを100とした場合の陳述、感嘆、疑問、反問の長さの比率は以下のようなになる。中国語は100 : 155 : 93 : 143、日本語は100 : 165 : 116 : 151。いずれの言語においても感嘆文と反問文が陳述文・疑問文より長く、特に感嘆文が一番長い。しかし陳述文と疑問文の長さについては中国語と日本語で逆になっており、中国語では陳述が疑問より長く、日本語では疑問が陳述よりやや長い。しかしそれぞれの差は15%以内であり、特に差があるとは認められないだろう。

## 4. 3. 振幅の比較

4つの語気内容を示す場合、内容の違いを強調するため、振幅にも違いが出る。われわれは資料の振幅を計算し、以下のように中国語と日本語のそれぞれの語気における平均の振幅の数値を得た。



4つの語気内容を示す場合、振幅にも違いがある。陳述文の振幅を100とした場合、陳

述、感嘆、疑問、反問における振幅の割合は以下ようになる。中国語は 100 : 97 : 90 : 107、日本語は 100 : 106 : 100 : 100。強さからいうと中国語では反問が一番強く、日本語では感嘆が一番強い。興味深いのは、日本語では感嘆文は比較的強いが、ほかの3つの語気は差がほとんどないということである。中国語では反問以外の3つの語気とも違いがあり、疑問が最も弱く、反問の89%しかない。しかし、全体的にいて振幅の上で4つの語気は目立った差はなく、振幅において4つの語気の内容を区別することはできない。

#### 4. 4. 音声特徴のまとめ

上記の比較分析により、中国語と日本語の形容詞1語文において陳述、感嘆、疑問、反問という4つの語気内容を区別する音声的手段を以下のようにまとめることができる。

- i. イントネーションの形から見ると、中国語も日本語も陳述文と感嘆文の基本周波数曲線は下降曲線を示し、疑問と反問は上昇曲線を示す。つまり、聴覚において陳述と感嘆は下がって聞こえ、疑問と反問は上がって聞こえるということである。
- ii. 陳述と感嘆の違いは、両言語とも主として長さによって表され、感嘆文の長さは陳述の1.5倍前後ある。また、振幅については違いがあり、中国語では陳述文は感嘆文より強いが、日本語では感嘆文が陳述文より強い。
- iii. 疑問と反問の区別は両言語で同じではない。まず基本周波数曲線から見ると、中国語はすべての音節に固有の声調があり、上昇を示すのは第2音節だけであることから、第1音節の声調の違いにより、上昇と屈折の2種類の軌跡を描く。疑問と反問は基本周波数、長さ、振幅の3つで区別される。基本周波数でいうと、反問は疑問より音域が広く、約1.5～2倍の幅がある。長さからいうと、反問文の長さは疑問の約1.5倍ある。振幅から見ると、反問は明らかに疑問より強く、約1.2倍ある。日本語はこれとは違い、疑問と反問のどちらも基本周波数曲線は屈折の軌跡を示すが、音域には大きな差がない。その区別は主に基本周波数変化と長さの違いによって表されている。一般に反問は、基本周波数において疑問よりも明らかに高く、長さにおいて疑問の約1.3倍ある。

#### 5. イントネーションと意味

上述した実験において、われわれは中国語と日本語の形容詞1語文における音声形式上の違いを検討した。ここでは陳述、感嘆、疑問、反問という4つのイントネーション形式について述べたが、より広い語気の観点に立つと、あらゆる言語は語気において陳述、疑問、命令、感嘆の4つに大別されるといえる。命令文は命令や請求を表す文で、その語気

内容は相手に何かをするように、あるいは何かをしないようにさせるというもので、ここから動詞がその主たる構成要素となる。一般的に、形容詞は単独では命令文になりにくく、他の動詞とともに使われてはじめて命令、請求、勧告などの語気内容を表す。しかし、品詞分類そのものが非常に難しい問題であり、語義に基づいて分類すべきか、文を作る上での機能に基づいて分類すべきかといったことは、少なくとも中国語文法研究者の間ではずっと論争の焦点となってきた。科学的に文を作る上での機能を分析するため、現在では機能を基準に品詞分類を行っているものの、結局は意味においてのお互いの了解を前提とした形式となっているのである。意味上、ある語は動作性をも性質描写性をも持つということがある。動作性を持つという意味では動詞に近く、性質描写性を持つという意味では形容詞に近い。さらに、ある語が文法上の機能からある品詞に分類されていても、意味の上からは別の品詞と理解されるということもないわけではない。例えば、“小心”という語は文法機能から見れば形容詞であるが、しかしその使用において抽象的な動作の意味を持つことがあり、このことによりしばしば命令文として使われる。中国語には数は多くないものの、このように動作を示す形容詞が存在し、これらは動詞と同様に単独で命令文を作ることができる。そこでわれわれはこの点に基づき、4つの語気分類の観点から日中両言語における形容詞1語文のイントネーションと意味の関係を見ていくことにする。

### 5. 1. 陳述と下降のイントネーション

1つの形容詞から成る陳述の1語文は、一般に発話者の主観的評価、判断を示し、発話者自身が情報源である。そのイントネーションは以下のように下降を示す。

- (1 c) 漂亮。      \ (那个小姐漂亮。)
- (1 j) かわいい。 \ (この子はかわいい。)
- (2 c) 涼快。      \ (夏天北海道涼快。)
- (2 j) 高い。      \ (このカメラは高い。)

(1 c) と (1 j) はともに発話者の評価であり、(2 c) と (2 j) は発話者の判断である。中国語も日本語も発話者は相手に情報を伝達しており、その情報は客観的なもの（夏天北海道涼快；このカメラは高い）でも、主観的なもの（我以为那个小姐漂亮；私はこの子はかわいいと思う）でもかまわない。もし発話者が相手の質問に対して答えているとすれば、発話者が自分から相手にある情報を与えようとしているということになる。聞き手がその情報を自分から受け取っているにせよ、受け取らされているにせよ、やはり発話者からある確定的な情報を受け取っていることに変わりはない。情報の真偽や信頼度の高さは聞き手自身が分析、判断、確認することである。例えば、(1 c) の文における“漂亮”というのは発話者自身の判断であって、その少女が発話者の中にある“漂亮”の基準に合致したものとして、情報を送り出したものである。“漂亮”だという評価は、発話者は別のところから得たものだということもあるが、この場合は単に情報を伝達したということ

になる。自分で送り出したものであれ、別のところからの伝達であれ、発話の時点で発話者が示す“那个小姐漂亮”という情報は疑いのないものだ。“かわいい”も同様で、自分自身で“かわいい”という印象をもっているにせよ、別のところから“かわいい”という評価を聞いたにせよ、この時点で発話者が“この子はかわいい”という情報を持っていることになる。情報の伝達という観点から見ると、このような1語文はすべて情報源である発話者が聞き手に向かって一定の情報内容を伝えているものであり、1つのまとまった情報の送出と受領のプロセスをなしている。1語文の下降のイントネーションがこうした会話の進行を示している。

## 5. 2. 命令文と下降のイントネーション

范晓 (1998) によれば、一般的な文法書では命令文を、命令を示すもの、請求を示すもの、禁止を示すもの、勧告を示すものの4つに分類しているという。これはかなり概括的な分類である。命令文のもつ意味は非常に豊富で、その対象の違い、発話者の心理や主観的願望の違い、相手にさせたい、あるいはさせたくないことの違い、表現の際に使われる語や実際の語気の違いなどにより、違った特徴を表す。まず、以下の例文を見てほしい。

(3 c) 安静! \ (不要说话, 请安静!)

(3 j) 早く! \ (早く食べなさい。)

(4 c) 小心! \ (小心! 前面有水沟。)

(4 j) 長く! \ (長く伸ばしなさい。)

これらはいずれも命令文である。発話者が聞き手(1人の場合もあるし、それ以上の場合もある)に対してある種の命令、要求、請求といったものを提示している。しかし中国語と日本語では違いがあり、中国語では語の周波数や強さを増したりスピードを速めたりして発話することによって命令の意味を出すのに対し、日本語では語形の変化によって命令の意味を出しているのである。このとき、日本語においてこの語は形容詞ではなく、副詞として働く。ここでは中国語との比較を容易にするため、語義に注目し、区別をせずにこれをやはり形容詞として扱う。日本語には語形変化があり、異なった語形により命令と陳述・感嘆とをはっきり区別することができるため、イントネーション上の手段を用いる必要がなく、音声形式においては陳述文と何ら違いはない。

ここで言いたいのは、形容詞は陳述や感嘆のイントネーションを付加することにより、それだけで陳述文や感嘆文を作ることができるのに対し、命令文では違うということである。中国語においては単独で命令文を作れる形容詞は非常に少なく、“安静、快、慢、小心、放心、镇定”といったいくつかの語に限られる。日本語も同様で、語形変化により命令とそれ以外の内容を区別できるとはいえ、やはり単独で命令文となれる形容詞は多くはない。その原因はほぼ共通であり、形容詞の主な機能が描写であり、一般的には動詞が担う命令、請求、禁止、勧告といった意味を直接表現することができないからである。従って

普通は他の動詞と組み合わせることによってはじめて命令文とすることができる。“快、慢”といった語はしばしば単独で命令文となるが、これは後ろの“走、写、吃、喝”といった動詞を省略したものだとも見ることができる。命令文の主要な構成要素は動詞であり、“快走！放心去吧！速く行きなさい！高く上げなさい！”といった命令文において、意味の重点は“走、去、行く、上げる”という動詞部分にあり、“快、放心、速く、高く”という部分にあるのではない。日本語の語形変化はこうした文法上の観念を反映しているものであり、形容詞が語形変化により副詞になるということは、それが動詞を修飾するという文法上の機能に基づいているからである。意味の重点がどこにあるかということにより、動詞を省略し形容詞が単独で命令文を作ることができるのである。

中国語においても日本語においても形容詞1語から成る命令文は非常に少ない。しかし動詞の省略ということを考慮に入れ、特殊な環境に限っていえば、命令文になれる形容詞はずっと増える。例えば、演出や演技指導において俳優に何か要求を出すときを考えてみよう。“高兴！（表现得高兴一点儿！）悲伤！（表现得悲伤一点儿！）喜悦！（表现出喜悦来！）低！（声音再低一些！）”“楽しく！（楽しそうに表現して！）悲しく！（悲しそうに表現して！）低く！（声をもっと低く！）”などは、中国語においても日本語においても単独で命令文となりうるのである。

### 5. 3. 感嘆文と下降イントネーション

まず、次の例文を見てほしい。

(5 c) 聪明！ → （这孩子真是聪明啊！）

(5 j) かしこい！ → （この子は賢いな。）

(6 c) 漂亮！ → （那女孩可真漂亮啊！）

(6 j) きれい！ → （あの子は綺麗だな！）

中国語も日本語も、感嘆の語気を表す場合、下降の調子を示す以外に音声上2つの一致した特徴がある。(1)長さの増加。中国語でも日本語でも、感嘆文の平均の長さは陳述文の約1.5倍あり、長さの増加は主として母音が引き伸ばされることによる。中国語の1音節形容詞、例えば“貴！”“灵！”といったものはその声調が下降（去声）であっても上昇（陽平）であっても母音が引き伸ばされて平坦な調子に近くなり、その語尾だけが下降する。2音節語、“漂亮！”“聪明！”，のような語であれば第1音節の母音が引き伸ばされ、第1音節の上昇・下降の幅が縮まって（陽平、上声、去声の場合）平坦な調子に近くなり、その後第2音節で下降して全体的に下降の形となる。日本語において感嘆の形容詞1語文は2音節、3音節、4音節がもっともよく見られるものであるが、いずれであっても下降の形を示す。2音節の感嘆文は主として3音節の省略からくるものであり、最後の“い”が“っ”に変わって、“たかっ！”“あつっ！”などという言い方になる。これは特に子供の会話においてはよく見られる。こうした2音節語は長さにおいて非常に特殊で、長さが

増加しないだけでなく、促音の“ッ”で終わることによって唐突な感じを出す。もともとある音節をなくすことにより、強さを増しているのである。3音節と4音節の形容詞が感嘆文となると、典型的なのは後ろから2番目の音節を長く伸ばす形式である。例えば、3音節の“ちか〜い!”“うま〜い!”は“か”と“ま”の長さを増しており、4音節の“かしこ〜い!”“すくな〜い!”は“こ”と“な”の長さを増している。このほか、感嘆文においては振幅の増加もかなり大きいものである。(2)後ろから2番目の音節を引き伸ばすことにより、語全体のイントネーション曲線が陳述や命令のように急に下がる形ではなく、平らな調子で一定の長さを保持し、最後の音節ではじめて下降するようになる。われわれが上記の例文で感嘆文のイントネーションの形を示す符号に平らな部分を付加した理由はここにある。中国語の2音節語では第1音節に声調による上がり下がりがあるが、音節が引き伸ばされることによってその形式がゆるみ、下降(上声や去声)であっても上昇(陽平)であっても長さの増加により平坦に近くなって、聴覚上でも平坦に感じられるのである。(3)感嘆の程度はどちらの言語においても引き伸ばされる時間によって表される。時間が長くなるほど程度が強まり、短いほど弱くなる。これには決まった対応関係があるわけではないが、引き伸ばされる時間の長さによって発話者の感嘆の程度を把握しているということは明らかである。

#### 5. 4. 疑問文と上昇のイントネーション

この部分において、われわれは疑問と反問を一緒に考えようと思う。まず下の例文を見てほしい。

- (7 c) 聪明?       ↗ (这孩聪明不聪明?)  
 (7 j) かしこい?   ↗ (この子は賢い?)  
 (8 c) 漂亮?       ↗ (那女孩漂亮不漂亮?)  
 (8 j) きれい?     ↗ (あの子は綺麗?)  
 (9 c) 聪明?!      ~ (你说什么? 这孩聪明?)  
 (9 j) かしこい?! ~ (この子は賢い? そんなことない。)  
 (10c) 漂亮?!      ~ (你说什么? 那女孩漂亮?)  
 (10j) きれい?!    ~ (あの子は綺麗? そんなことない。)

ここで(7)(8)は一般的な疑問文、(9)(10)が反問である。区別のために、反問文には?と!の両方をつけ、さらに上昇の記号~をつけた。

疑問文の用途は聞き手に何かを訊ねるということであり、イントネーション形式としては上昇となる。上昇は主として音声の周波数の増加によって表される。この疑問文は当否疑問文に属し、聞き手に聞いた内容に対して肯定か否定かの判断を求めるものである。“聪明?”“漂亮?”は上昇のイントネーションにより相手に“~聪明(漂亮)吗?”ということを知って相手の答えを求めているのであり、日本語も同様に“かしこい?”“きれ

い?”は上昇のイントネーションによって“～はかしこい(きれい)ですか”と訊ねて相手から情報を得ようとするのであり、情報源は聞き手の方である。反問文は疑問の形式を採っており、イントネーションは上昇する。しかし一般の疑問文とは異なり、反問文は相手に訊ねる文ではなく、わかっていてあえて訊ねているのであり、文はすでに発話者の判断を含んでいるといえる。“聪明?～”“漂亮?～”に示される屈折した上昇のイントネーションは相手に“～聪明(漂亮)吗?”と訊ねているのではなく、“难道～聪明(漂亮)吗?”とあって相手を非難し、自分自身の“我不觉得～聪明(漂亮)。”という考えを伝えているのである。日本語の“かしこい?～”“きれい?～”も同様で、これは相手に何かを訊ねる文ではなくむしろ陳述であり、しかも非常に強い陳述である。述べようとしているのは“～は賢くない(きれいではない)と思う。”ということであり、情報源は発話者のほうである。

前に述べたように、この2つの語気はどちらも文末のイントネーションによって示されており、ある文が疑問文か反問文かを判断する際の弁別率は陳述文、感嘆文ほど高くはない。われわれは資料を1つ1つ示して聴取者に一般的な疑問文か反問文かを選ばせる際、しばしば彼らが迷い、何度も躊躇する様子を目にした。一般的な疑問文と反問文の資料の順序をアランダムにし、それぞれを聞いて弁別する際の正答率は、日本語の疑問文89%、反問87%であり、中国語の疑問文91%、反問93%であった。しかしわれわれが2つの資料を同時に示してそのどちらが疑問文でどちらが反問文かを判断してもらった場合には、日中両言語とも弁別率はほぼ100%になった。このことにより、両言語とも疑問と反問にははっきりした長さの差がなく、中国語においては強さ(振幅)の差がやや大きいとはいえ、いずれもそれは相対的なものにすぎない。長さにしても振幅にしても語気の区別において決定的な作用をしているわけではなく、周波数曲線の補助的な役割を果たすにすぎず、やはり語気の区別において最も重要なのは周波数である。周波数における音域の広さの違いは人の耳によって区別することは難しく、人の耳はこれに対しては非常に鈍いといっべてよい。音域の広さが異なる周波数の資料を一緒にして比較する場合に限って、耳はそれに反応し、正確な弁別ができるのである。

## 6. まとめ

以上のように、われわれは実験音声学の手法を用いて中国語と日本語の形容詞1語文がイントネーション形式に示す音声上の特徴を比較分析してきた。この過程において、中国語と日本語ではイントネーション形式において同じ部分と違う部分がある。

陳述と感嘆のイントネーションは両言語において下降を示し、中国語の感嘆文はその始まるの周波数が陳述文よりやや低い。長さにおいて、両言語とも感嘆文が陳述文よりかな

り長い。振幅では、日本語の感嘆文は陳述文より強いが、中国語は逆に感嘆文のほうが陳述文よりやや弱い。振幅の差は小さいため、両言語とも陳述と感嘆のイントネーション形式は比較的一致していると言ってもいいだろう。つまり、主として後ろから2番目の音節が伸ばされるかどうかによって、陳述か感嘆かを判断するのである。

命令の意味をもつ形容詞1語文は両言語とも非常に数が少ない。その理由は、形容詞の主な機能が描写にあり、命令文は動作性のある文であるため動詞がその主たる構成要素だからである。さらに、中国語には語形変化がなく、形容詞が命令のイントネーションをもつのであればそのまま命令文としてもよい。しかし日本語では、語形変化を経てはじめて命令文になるのであり、語形変化をしたあとの形式が副詞となっているため命令文とすることができる。われわれは中国語との比較を容易にするため、これらを形容詞として扱い、形容詞が変化して副詞となったものを中国語の形容詞と同等のものとして検討した。日本語では語形変化によりはっきりと陳述と命令を区別することができるため、1語文の場合でも音声上では特別な変更を加える必要はなく、音声面では命令と陳述ではほとんど差はない。しかし中国語ではイントネーションの違いが唯一の手段であり、主として語の周波数と強さを増し、スピードを上げることによって命令の意味を出すのである。

疑問文と反問文の音声形式は、両言語で違いがある。中国語にはすべての音節に声調があるため、最後の音節を除き、その他の音節の固有の声調はイントネーションにおいても保持されている。疑問文において文末の音節は上昇を示し、前の音節と組み合わせると、イントネーションにおいては上昇と屈折の2つの形式を見せる。しかし日本語においては屈折の形式しかない。一般的な疑問と反問の区別においては、中国語の基本周波数の広さ、音の長さ、振幅がすべて機能を果たしている。反問文は疑問文より基本周波数の音域が広く、音が長く、振幅も強い。日本語の区別は基本周波数の高さや音の長さの2つによってなされ、反問は一般的な疑問文より基本周波数が高く、音が長い。

このほか、われわれはイントネーションと意味の関係についても簡単に述べてきた。

このような日中のイントネーションの比較は小さな部分に過ぎない。範囲を単文の中の1語文、さらにその中でも形容詞1語文に限って見てきた。語気の面からみると、拙文はおおまかな語気の分類のみによって行い、細部にわたって検討したわけではない。また検討の深さからみても、2つの言語がイントネーションに示す音声の特徴の違いを比較しただけで、その原因についてさらに深く論証してきてはいない。つまり、イントネーションの比較、日中の1語文のイントネーション比較においてはさらに多くの研究に値する内容があるということであり、これはわれわれの今後の研究課題ともなるものである。

---

## 注

- (1) 2音節語を選んだのは、主に以下のような考えによる。(1) 現代中国語においては2音節語が優勢であり、形容詞においても2音節語が絶対的多数を占める。従って、これを標準的な形式とした。(2) 声調の組み合わせを考えた場合、2音節語は異なる声調による音声の影響や変化が観察しやすいためである。
- (2) これは、日本語の主要な形容詞が3音節と4音節の2種類だからである。

## 参考文献

- 张秀 (1959), 《汉语动词的“语气”系统?》, 《语法论集》第3集, 商务印书馆
- 胡明扬 (1981), 《北京话的语气助词和叹词上》, 《中国语文》1981年第5期, 商务印书馆
- 胡明扬 (1981), 《北京话的语气助词和叹词下》, 《中国语文》1981年第6期, 商务印书馆
- 陆俭明 (1984), 《关于现代汉语里的疑问语气词》, 《中国语文》1984年第5期, 商务印书馆
- 贺阳 (1992), 《试论汉语书面语的语气系统》, 中国人民大学学报1992年第5期, 中国人民大学出版社。
- 劲松 (1992), 《北京话的语气和语调》, 《中国语文》1992年第2期, 商务印书馆
- 黄国营 (1994), 《句末语气词的层次地位》, 《语言研究》1994年第1期, 华中工学院出版社
- 前川喜久雄 (1997), 「日本語疑問詞疑問文のイントネーション」, 『文法と音声』, くろしお出版
- 森山卓郎 (1997), 「一語文と文末イントネーション」, 『文法と音声』, くろしお出版
- 小山哲春 (1997), 「文末詞と文末イントネーション」, 『文法と音声』, くろしお出版